

## 10 三遠南信住民セッション 要旨

### ■挨拶

#### 三遠南信住民ネットワーク協議会

代表世話人 山内秀彦氏

三遠南信サミットの開催も5巡目に入り、行政・経済団体・住民団体の三位一体の形でやることが定着したが、若干参加者の顔ぶれも変わってきた。



本年は、三遠南信地域連携ビジョンの策定後10年を迎え、見直し作業を進めている。今後の10年間を考えて、地域で連携し、活動している方の生の声を三遠南信地域連携ビジョンに活かしていくことが必要である。

そんな視点で、これまでの取り組みに加えて今後の三遠南信地域の連携について、若い人たちなど新たな人たちが入り込み、新しい風、流れを起こしている事例を紹介するなど様々な話題を提供していただきながら、意見交換を進めていきたい。

### ■これまでの連携ビジョンの評価と新ビジョンの説明

#### 1) 新ビジョンの策定状況について

- ・本年度から、学識経験者や経済団体などが新ビジョン策定委員会に参画し、策定作業を進めている。SENAが中心になり、ビジョン策定委員会にて意見をとりまとめている中で住民団体も参加していく。
- ・平成30年度の三遠南信サミットで、新ビジョンの承認を得るべく、現行のビジョンを総括し、見直ししている段階である。

#### 2) 連携ビジョンの評価

- ・現行のビジョンの評価について、重点プロジェクト別進捗状況カルテ（道・技・風土

山・住で評価したもの）を基に、説明した。

#### 3) 新ビジョンの基本方針

- ・人口減少が続く中で、三遠南信地域をどのように活性化させるかが課題である。基本方針（案）では五つの目的を掲げている。
  - 交通基盤、
  - 産業構造
  - 地域資源の活用
  - 広域生活圏 流域文化
  - 人づくり
- ・現時点では、地域の目指す将来像（三つの柱）及び基本方針（案）までが策定委員会において決まった。重点プロジェクトに関しては、今回のサミットと今後の策定委員会の議論を通じて作り込んでいくことになっている。
- ・三遠南信サミットの分科会では、どのような重点プロジェクトに取り組んだらいいかという点を議論する。本日の意見交換会において、「こんなことをやりたい！」という具体的な提案をしていただきたい。



## ■新しい風・流れの事例紹介

静岡文化芸術大学 文化政策学部  
准教授 船戸修一氏

- ・自己紹介：  
農村社会学を研究している。  
商業活性化ネットワークをつくる研究も行っている。



- ・私が話すのはミクロな話であるが、これが忘れてはいけないことで、大事なことはないかと認識してほしい。
- ・中山間地域の問題は、三圏域ともに共通するテーマを抱えている。
- ・一般的に人口が減ると集落が消滅するという議論がある。自治体や国家も消滅すると言われている。
- ・私は、「人が減るとまちはなくなる」という議論は根拠がないと考え、調査している。
- ・私のゼミで考えているのは、人口はこれまではむしろ増えすぎたのだから、各自治体で減っても対応できる、高齢化・人口減少を過疎問題に結びつけるのはどんなものか、減少することを冷静に考えた地域づくりを考えるべきだと思う。

### ■東日本の災害で

- ・東北地方では、190 の集落の消滅や村の統合があった。既存の集落数ではなく、集落数が減った。住民自らが自発的に集落を出るといよりは、住みたかったけれども奪われてしまったことに起因している。
- ・人口減少は集落消滅に直結しない。過敏に反応してはならない。悲観的な将来像を描くことはよくないのではないと思う。
- ・人々は「住むことができないのだから」と思い始め、中山間地域から出ていく。住むことに対する誇りを持たば、集落は残

り続けるであろう。冷静に対応することが必要ではないかと思う。

### ■限界集落についての誤解

- ・限界集落とは、農村社会学の大野晃先生が高知の山村を調査してつくった言葉で、本来は 65 歳以上の人口が半分以上を占め、社会的共同生活の維持が困難である集落を指すが、今は消滅集落だと誤解を招いている。

### ■高齢化率が高くなると集落は消滅してしまうのか？

- ・近隣に住んでいる子どもが、集落へ頻繁に通い、近隣住民に対しても作業や買い物の手伝いなどをすることで、住民の数が減っても集落は残る。

### ■佐久間町

- ・佐久間ダムを造っている時に人口が増え栄えたが、1955 年をピークに、人口が減少している。
  - ・佐久間町のとある集落の人口は 17 人とされていた。行政は集落を出て行った人がどこに住んでいるかデータを持っていないので、1 軒ごとに聴き取りを行ったところ、子供と孫などが 32 人いることが分かった。この人たちは、集落外に出て行っても、それまでの経験があり、集落に対する責任感が違う。こういった人たちがいるから、まだまだ期待できる。
  - ・集落を出て行った人の大半が 2 時間で移動できる範囲に住んでいる。道路事情が良くなった現在、年に 11 回、月 1 回は帰っている人が 58%いる。もっと通わせるようにしませんか？
  - ・集落にいる人たちだけでなく、集落から出て行った人を含めて集落の将来図を考えていく方針である。
- ### ■担い手は、移住者よりも家族
- ・かつては三世代四世代が同居していた。現在は地域外に住んでいて、集落を超えた家族の考え方が広がったのではないか。

- ・地域に残る親は「こんなところに帰って来ない。」と言うが、地域を出ていった子どもには直接聞いていない。子どもたちの帰郷意思を調査したら、2割くらいが帰りたいたいの思いがあった。しかし、子どもはその思いを親に伝えていない。
- ・住まない選択の人たちが、どうしたらその地域で暮らすのかも考えるべきである。

#### ■運動会やまつりをする

- ・帰ってくる時に隣の人と人間関係ができていない。隣近所とのつきあいをつくりたい。私たちがそのコーディネートをやりますと言っている。
- ・来年、運動会まつりをして、出て行った人たちのネットワークをつくることを働きかけるように計画している。



### ■三つの圏域から「新しい風・流れ」の報告

#### 1) 東栄町 若者地元会議「りん」

##### 伊藤拓真氏【東三河】

- ・東栄町に住んでいたが、大学に進学したのに伴い名古屋に出た。その経験から感じたことは、地元から離れていくと地元とのつながりをなかなか持てないということ。地元に戻りたいとの思いはあったが、どう帰ったらよいかかわからなかった。そして、周りに自分と同じ思いを抱いている人が多いことを知った。



- ・それならば、都市部に住んでいても地元に戻ることができるコミュニティをつくろうと考えたことが活動のきっかけである。

#### <これまでの活動を紹介>

##### ■東栄どりんくす

- ・2ヶ月に1回ほど東栄出身者やゆかりのある人が集まり、新たなコミュニティを醸成する。

##### ■まち冒険

- ・学生が長期休みに集落を訪問する。
- ・地域の人と話すことで、知らなかった地元を知り、新たな企画を考えることができる活動となっている。

##### ■地元巡りん

- ・イベントとして、帰省の時期に開催。
- ・地元のことを学び直す。各メンバーの学んだ内容を活かして、森林について考えたり、町のイベントでブース出店したりしている。たとえばオリジナルTシャツをつくる体験ブースの出展などを通じて、地元イベントに行きにくい若者が主体的に参画するきっかけづくりをしている。

##### ■山暮らしカンパニーとの合同企画

- ・南信の団体である「山暮らしカンパニー」と知り合い、コラボして地域づくりに関わる若者の交流の場やコミュニティづくりを行っている。

- ・それぞれが抱える問題も似ているので、若手が問題に対してそれぞれの団体で人材育成に取り組み、シェアすることで問題解決できるのではないかと考え、活動している。

##### ■情報発信

- ・LINE、Facebook、インスタグラム、ツイッターなど様々なSNSで出身者向けに地元の情報を発信している。

##### ■今後は、活動を広げたい

- ・イベントに関わるきっかけを提供したい。
- ・新しい帰省の形を発信する。
- ・若者地元会議と称して地元の課題解決方法

を議論して提案する。地元との新しい関わり方として、都市部にいながらこの地域に関われる仕組みをつくりたい。

## 2) NPO 法人てほへ副理事長・志多ら総合統括プロデューサー 大脇聡氏【東三河】

- ・自分自身がIターンしてきた。自分の子どもは東栄町に生まれ育っている。地元生まれの人が一番地域に愛着があるので、Iターン者よりも帰ってきたい想いを持っている。地元出身者が地元と関われるコミュニティ場づくりをする「りん」を支援するため、当NPOが管理運営する「のき山学校」を活用して活動できるように協力及び支援し、連携をすすめている。

## 3) やまびこチャレンジ 代表 鈴木崇斗氏（浜松学院大学 学生団体）【遠州】

- ・平成28(2016)年4月に浜松学院大学の学生が主体となり設立した市民団体である。中山間地域の活性化や都市部とつなぐことを目的に活動している。文部科学省から認可された「長期学外学修プログラム」により、春野の勝坂集落に1ヶ月住み込んで「勝坂かぐら」の練習をして活動している。
- ・プログラム終了後も継続的に中山間地域で活動できるよう、大学のサークルではなく市民団体とした。



### ■活動内容

#### ①伝統芸能継承

- ・勝坂神楽：浜松市天竜区春野町勝坂に伝わる伝統芸能
- ・川名のひよんどり：浜松市北区引佐町川名に伝わる国指定重要無形民俗文化財
- ・大学生と民俗芸能協働の取組事例として、勝坂神楽の学習と参加、川名のひよんど

りの学習と参加を紹介した。これらの民俗芸能のお祭りに参加した学生たちが中山間地域の魅力を発信し、現在では学生が自主的に活動を行っている。

#### ②マーケットへの出店

…中山間地域の魅力を都市部へ発信！！

- ・アクト通りふれあいデイ：毎月第3日曜日にアクト通りにて開催されるイベント
- ・ザ・山フェス：10月14日、15日に浜松駅前ソラモで開催された山の魅力体験イベント

#### ③シンポジウムへの参加

#### ④やまびこスクール

- ・自然と触れる機会を作り、スクールを通して自分の地域の魅力を再認識・再発見してもらうことを目的とする。

#### ⑤市民農園…耕作放棄地を住民と再生

- ・現在は、そば・白菜・人参などを栽培。
- ・平成29年の春にはジャガイモを約100kg収穫！

#### ⑥茶屋運営…営業してないお店の再生

- ・平成29年8月より1年生が主体となり、毎週日曜日12:00～営業している。
- ・茶屋では、そば、かりんとう、クッキーなどを販売している。

#### ⑦水車復活 Project

…動かなくなった水車の復活

- ・ランドマークの復活と日本人の原風景を再生するため、水源とため池の修繕・掃除をし、水を送り込むことを始めた。

### ■今後の活動

- ・民俗芸能の魅力を多くの人たちに発信していく「ポータルサイト」の開設をしたい。個人レベルでは参加できない、相談できない人が中山間地域に来るきっかけをつくりたい。ただ、移住して人が増えることはいいが、学生にできることは限られる。
- ・大学の「長期学外学修」に参加する学生は、前年度に得た知識や技術を学生間で

継承していくことを考えている。

#### 4) 南信州交流の輪 矢澤律子氏【南信州】

- ・今までにない活動が生まれている。例えば、飯田下伊那地域出身の歌手が、全国に南信州地域をアピールしてくれている。
- ・地域おこし協力隊などの若い人たちが地域に入り込んで、自分たちの知恵、アイデア、仲間作りをして基盤を築いている。
- ・南信州交流の輪は「まつり街道弁当」の取り組みを行っている。
- ・三遠南信地域には、時季ごとの伝統芸能があるが、地元の人でさえ、見たことがない人も多い。それらの祭りをイベント的に紹介して、祭りの時に出す伝統食を「祭りと食文化」として紹介している。
- ・平成29年11月18日、五穀豊穰に感謝するイベント（体感講習会）を飯田市で開催する予定である。昼食交流会の中で五穀豊穰祝い弁当を提供する。
- ・今田人形浄瑠璃など伝統芸能をきちっと伝えたいと考えている。祭り文化を保存している人に学び、地域の文化を学習し、それを新しい風とつなぎ、文化を継承していく活動を行っている。



#### 5) 合唱劇「カネト」をうたう合唱団

清水良文氏  
【東三河】

- ・中山間地域の移住や地域おこし協力隊など外か



- ・から来た人がどのように町にかかわれるか。
- ・新城市では、5～6年前から社団法人をついている。組織作りが重要である。
- ・公的な支援も受けられる。
- ・今後、地域おこしがどうなるかが非常に楽しみである。地域おこし協力隊とのネットワークをつくれたらいいと思っている。
- ・若者が活躍しているようなら、東栄町も地元若者会議「りん」などとネットワークを組むことができると面白い。

#### ■グループディスカッション

3グループに分かれて、意見交換を行った。各グループの意見は、各グループのファシリテーターが以下のとおり報告した。

##### A グループ：ファシリテーター

##### NPO 法人地域づくりサポートネット山内秀彦氏

- ・地域にいかに入り込むか。地縁血縁で守ってもらいたい気持ちもあるが、まちを見に来て、地域の中に入り、地域のファンになる新しい志縁の形もある。
- ・地域側は志の縁をいかに受け入れていくか。
- ・気をつけなくてはならないのが肩ひじはらず、ただし、地域に入るには覚悟も必要である。
- ・この地域をなんとかしたい人が覚悟して移住するなり、通うためには、地域側との仲介が必要になる。
- ・セカンドキャリアを生かして働ける場所づくりも重要である。インターネットや自動車道などのインフラが発達したので、都市部に住まなくても生業・生計も立つようになれば、もっと移住者が増えることが期待できる。
- ・地域にゆかりのある人の関わりを求めている。呼びかける人の存在が大切である。くっつける人、フォローアップする人、中間支援組織・機能をつくる必要がある。

- ・時間はかかっても、“つなぐ機能”は実現しなくてはならないということがポイントである。



### B グループ：ファシリテーター

愛知大学総合郷土研究所 平川雄一氏

- ・地元にはゆかりのある人を含め、交流をするには、情報をきちんと発信し、情報を受け取る必要がある。
- ・その一つのやり方として、様々な情報を一つにまとめて発信した方がよい。どこでもやっている手法ではあるが、三遠南信広域の「フリーペーパー」を発行することができないか。
- ・また、バラバラになっている三遠南信地域の観光イベントなどの情報を集約して三遠南信地域のポータルサイトとして情報発信していく必要がある。
- ・ここ一年くらいは、NHK 大河ドラマの影響で直虎ゆかりの地である奥浜名湖周辺や高森町からの交流も増えている。しかし、情報がバラバラなので、観光行事・イベントなどの情報を集約してもらいたい。



### C グループ：ファシリテーター

NPO 法人三遠南信アミ 中野真氏

- ・三遠南信地域は、魅力あふれる素晴らしい地域であることをベースに、「ここに住み続け、訪れ、帰ってくるためのいろいろな仕組みをつくるのが大事である。
- ・何よりも人が大事で、本日の住民セッションのように情報交換する場がほしい。そして、場を形にして、継続するための仕組みづくりが必要である。
- ・集落が継続するためには、Uターン、Iターンを促進することも不可欠である。
- ・地縁、血縁の人が帰って来やすい場、受け入れやすい風土をどうつくるかが課題である。
- ・山に暮らすとなれば仕事も肝心で、仕事をどう提供するのか。また、人づくりがとても大事である。
- ・伝える、つなげる、支えることが大事である。
- ・三遠南信地域の魅力は中山間地域であり、海拔0~1000メートルを移動できる地域は珍しい。山と海があり、それを天竜川がつなぐ。その流域の暮らしの魅力やつながりを大切にしていけるべきである。
- ・地域内に大企業が多く、CSRとして社会貢献活動ができ、実際にやっている企業もある。都市とのつながりや大企業とのつながりもテーマにあげる必要がある。



## ■全体討議

### 1) 総括

三つのグループの意見を総括した。

#### ①地域と地域、人と人をつなぐ機能の構築

- ・中山間地域の DNA を有する人（出身者など）や、交流する人を誘導・支援する施策を三遠南信地域連携ビジョン推進会議に提案する。
- ・地域と地域、人と人を“つなぐ機能”（中間支援）の構築が必要である。
- ・そのコーディネート役としては、若者や学生を呼び込むためにも大学に期待できるのではないかな。

#### ②三遠南信の情報発信

- ・広域におよぶフリーペーパーの発行や学生が運営するポータルサイトや SNS を構築したい。

#### ③Uターン・Iターンの人が帰って来やすい仕組みづくり

- ・受け入れられやすい風土づくり
- ・セカンドキャリアを促進する施策
- ・大企業の CSR を活用して、Uターン者・Iターン者を呼び込む。

### 2) 新しい提案

NPO 法人地域づくりサポートネット  
代表理事 山内秀彦氏

- ・住民セッションでは議論しなかったが、三遠南信地域に新しい層の交流人口を呼び込み地域を活性化させるため、重点プロジェクトの一つとして、太平洋と日本海をつなぐ「塩の道」自転車旅の取組提案を紹介した。三遠南信地域の圏域からもう少し広くとらえて、塩尻・諏訪湖、そして新潟までをつなぎ、訪日外国人観光客も呼び込んでいきたい。
- ・国が自転車活用推進法を制定し、本年から施行されている。サイクルツーリズムも人気で、東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技が静岡県で開催となってい

ることもあり、サイクルツーリズムの聖地を目指す静岡県側から信州に向けた官民連携・地域連携の提案である。

- ・三遠南信自動車道や中部横断自動車道の高速道路が整備されていく中で、下道（現道）と沿線地域の活性化という課題に対しても提案したい。
- ・南北をつなげる鉄道を輪行として活用することで JR 飯田線の活用・活性化にも寄与できる。
- ・この提案は、午後のシンポジウム及び道分科会でも発表していくが、住民セッションで紹介し、新ビジョンの重点プロジェクトとして呼び掛けていきたい。

